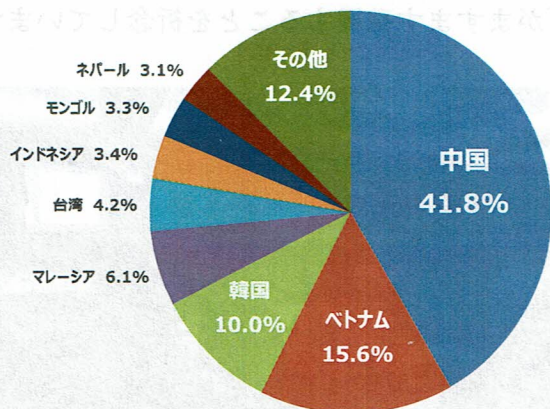




1. 2022 学年度の奨学生

2022 学年度の奨学生は昨年度より 10 人減の 900 人となりました。新規採用者 619 人、継続者 281 人です（4 月 8 日現在）。国・地域別に



みると、中国 41.8%、ベトナム 15.6%、韓国 10.0%、マレーシア 6.1%、台湾 4.2% の順です。プログラム別では、学部・修士・博士課程奨学金が 850 人（学部 430 人、修士 218 人、博士 202 人）、地区奨励奨学金 16 人、クラブ支援奨学金 8 人、海外学友会推薦奨学金 3 人、海外応募者対象奨学金 23 人となっています。4 月末までに各地区でオリエンテーションが開催されます。オリエンテーションは、奨学生とカウンセラーが出会い、奨学生としての義務やロータリーについて理解してもらう場です。確約書に署名をした後、正式に米山奨学生となります。どうぞ温かくお迎えください。

2. 巣立った奨学生へ — カウンセラーからのメッセージ —

米山奨学生のカウンセラーには年に 2 回、所見の提出をお願いしています。今回はその中から、今年 3 月に卒業した中国出身の米山奨学生、戸嬢さんのカウンセラーを務めた松林 茂会員（東京セントラル RC）からのメッセージを紹介します。



＜カウンセラーからのメッセージ＞

2 年間、当クラブでお世話をしたロウセンさんの卒業にあたり、カウンセラーとして最後の報告をします。2 年間とはいえコロナで例会も途切れがちとなり、ロウセンさんに対して十分な配慮ができたかどうか、自責の念にとらわれます。体感としては 8 カ月ぐらいしかお世話できていない感じです。他の会員にしても同じような感覚ではないでしょうか。

3 月の例会卓話では、彼女が東京大学大学院博士課程で醸造について学んできたことを、われわれにわかりやすく解説してくれる予定でした。コロナの影響でそれも叶わず残念です。大昔、ロウセンさんの故郷・中国から日本に伝わった酵母。これを使った醸造により

作られた味噌・醤油・お酒は、日本の食文化に欠かせないものです。若いロウセンさんがその中国から日本に勉強に来られていることに、先人たちの色々な交流の果てにわれわれが今を生きていることを実感します。

卒業後の彼女の進路がどのようなものになろうとも、日本の良き理解者として、中国との懸け橋として、今後大いに活躍されることを祈っています。

3. 寄付金速報 — 今年度初めて前年同期比増へ —

3 月までの寄付金は前年同期と比べて 0.1% 増（普通寄付金：0.9% 減、特別寄付金：0.6% 増）、約 50 万円の増加となりました。今年度に入り、前年同期よりも寄付累計額が増額になったのは初めてで、少しずつではありますが回復傾向に

あります。ロータリアン皆さまからのご支援に厚く御礼申し上げます。まだコロナ感染者数も減少せず、不安な日々が続いていますが、これからもご協力を賜りますようお願いいたします。

4. 東京米山ロータリーEクラブが創立10周年

米山学友を中心とする国内初のEクラブ、東京米山ロータリーEクラブ2750の創立10周年オンライン記念例会が3月20日に開催されました。事前に登録したロータリアンや米山学友、奨学生など海外からの参加を含む総勢100人ほどが出席。同クラブ会員やゲストが一部会場に集まり、そのほか約70人がZOOMで参加するハイブリッド形式で進行されました。

肖慧潔会長(2008-09/東京白金RC)は挨拶の冒頭で、新型コロナウイルスや戦争によって命を落とした人々を追悼し、黙祷を捧げました。つづいて、関博子クラブ特別代表の挨拶、三浦眞一ガバナーからの祝辞がありました。

記念式典の目玉は「未来を担う子ども達」をテーマとするパネルディスカッション。ファシリテーターの長崎智香子さん、パネリストのコイララアシュマさん(東京井の頭RC)、沈佳琦さん(東京立川こぶしRC)、タンシンナインさん(東京調布RC)、張沁瑩さん(茅ヶ崎中央RC)はいずれも同クラブ会員です。パネ

リストはそれぞれ、サマーキャンプやミャンマー・ネパールにおける教育支援、日本在住でありながら日本語が話せない子どもへの支援など各自の活動を紹介。最後にブレイクアウトセッションがあり、普段のEクラブ例会の交流体験が行われました。

現在、同クラブは会員37人(ほか名誉会員1人)、会員の出身国は7つの国・地域から構成されています。今後も若いパワーを生かし、クラブがますます発展することを祈念しています。



5. ウクライナの米山学友は今

ウクライナ出身の米山学友はこれまでに12人。そのうちの1人、『ロータリーの友』2021年2月号の「よねやまだより」に掲載されたテチアナ・セゾネンコさん(2017-19/大阪城南RC)の近況を紹介します。

戦争勃発後、それまで製剤化学者として農



作物のための薬剤を開発する日々を送っていたテチアナさんの生活は一変。祖国のために何かできることを…と考えた彼女は志願してボランティア団体に入

り、最も弱い立場にいる人々のために、赤ちゃんのオムツや粉ミルク、衛生用品、食料、飲料水、ペットフードなどの生活必需品を送る活動を始めました。時には足りない薬を探しに奔走し自費で購入することも。文字通り昼夜を問わず奮闘する日々を送っています。彼女の世話クラブである大阪城南RCも、会員や米山学友から寄せられた義援金を送金したということです。テチアナさんは次のように語りました。「ロータリーの皆さんからのお金は難民の支援に充てています。私は首都キーウ(キエフ)から80kmほど離れた所にいて、破壊された町から逃げてきた人々の手助けをしています。一番の願いは小さな子どもたちが普通の生活を送れる日々を取り戻すことです。私の心はウクライナとともにあります。一日でも早く、明るい日が来てほしい。ウクライナから希望をこめて」